

2023. 4. 16 (日) 使徒7:44~50

7:44 私たちの先祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりのものでした。

7:45 私たちの先祖たちは、この幕屋を受け継いで、神が自分たちの前から追い払ってくださった異邦の民の所有地に、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ダビデの時代に至りました。

7:46 ダビデは神の前に恵みをいただき、ヤコブの家のために、幕屋のとどまる場所を求めました。

7:47 そして、ソロモンが神のために家を建てました。

7:48 しかし、いと高き方は、手で造った家にはお住みになりません。預言者が語っているとおりです。

7:49 『天はわたしの王座、地はわたしの足台。あなたがたは、わたしのためにどのような家を建てようとするのか。——主のことば——わたしの安息の場所は、いったいどこにあるのか。』

7:50 これらすべては、わたしの手が造ったものではないか。』

<説教>

ステパノは同胞イスラエルの民、ユダヤ人たちに向かって、〈私たちの先祖たち〉が昔モーセの時代、神に対して犯して来た罪について語りました。荒野の集会でモーセが語り教えた神の生きたみことばにに従わず、逆らい、エジプトを振り返り、自分たちの手で造った偶像を拝み楽しんだのだ、と(38-41)。そして、その後もおよそ千年ほどの長きに渡って預言者たちが語った神の生きたみことばに聞き従わず、自分勝手な神礼拝、すなわち偶像礼拝をして神の大きな怒りとさばきを受けることになった、と。神は彼らに背を向け、彼らが天の万象に仕えるに任せられた、と(42-43)。ステパノはやがて指摘します。その時ステパノを「神とモーセを冒瀆している」として訴えたユダヤ人たち、また神が約束のキリストとしてお遣わしになったイエスを信じないで十字架につけて殺したユダヤ人たちこそは神とモーセを冒瀆し、先祖たちと同じ罪を犯しているのだ、と(51-53)。

さて、ユダヤ人たちがステパノを訴えた口実がもう一つありました。それは、「この人は、この聖なる所と律法に逆らうことばを語るのをやめません。『あのナザレ人イエスは、この聖なる所を壊し、モーセが私たちに伝えた慣習を変える』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」ということでした(6:13-14)。〈この聖なる所〉とはエルサレムの神殿のことです。つまりステパノは(イエスと同じように)神殿をも冒瀆している、軽んじている、大事にしていない、そうやって神とモーセを冒瀆している、として訴えられました。それで、ステパノは、もちろん自分はそんな者ではないと弁明するのですし、いや逆にステパノを訴えているユダヤ人たちこそが神殿について、そして神ご自身について大きな誤った理解をし、思い違いをしているとその罪を指摘するのです。つまり、神殿での礼拝が、神と神の〈生きたみことば〉に従っていない礼拝、自分勝手に考え出された偶像礼拝になってしまっているとステパノは言うのです。そして彼らの神殿についてのそういう罪は〈私たちの先祖たち〉が、神殿より前の〈幕屋〉の時代に既に陥っていた罪過ちと同じだとス

テパノはここ(44-50節)で指摘するのです。

〈私たちの先祖たちのためには、荒野にあかしの幕屋がありました。それは、見たとおりの形に造れとモーセに言われた方の命令どおりのものでした。〉(44) このように〈幕屋〉は出エジプトの後、シナイ山で神がモーセにお示しになった形どおりに造られました。「彼らにわたしのための聖所を造らせよ。そうすれば、わたしは彼らのただ中に住む。幕屋と幕屋のすべての備品は、わたしがあなたに示す型と全く同じように造らなければならない。」(出エジプト 25:8-9)と神がモーセにお命じになったとおりに幕屋は造られました。〈あかしの幕屋〉と言うのは、幕屋(の至聖所)に「あかしの箱」が置かれ、その箱に十戒が書かれた二枚の板(さとし(「あかし」と同じ語)の板)が納められたからでした。〈幕屋〉は神がイスラエルの民のただ中に住まわれる、神が彼らとともにおられることを〈あかし)するものだったとも言えるでしょう。

そのように確かに〈私たちの先祖〉は荒野で幕屋を造りました。更に〈私たちの先祖たちは、この幕屋を受け継いで、神が自分たちの前から追い払ってくださった異邦の民の所有地に、ヨシュアとともにそれを運び入れ、ダビデの時代に至りました。〉(45) この言葉を表面的にだけ見ると、〈私たちの先祖たち〉は神にちゃんと従ったとステパノはここでは言っているように見えます。しかし、直前の 38-43 節、そして直後の 48-53 節との繋がりを見なければなりません。すると、ここでもステパノが強調していることは、〈私たちの先祖たち〉はモーセを通して与えられた神の〈生きたみことば〉に従っていなかった、自分たちのために自分勝手に金の子牛を造って拝み仕えた偶像礼拝の罪をずっと〈受け継いで〉、引きずっていたということだとわかります。たとえ〈形〉は〈モーセに言われた方の命令どおり〉にしていたとしても、その内面はを通して与えられた神の〈生きたみことば〉に聞き従っていなかったということです。「イスラエルの家よ。あなたがたは荒野にいた四十年の間に、いけにえとささげ物を、わたしのところに携えて来たことがあったか。」(42)これがステパノが〈預言者たちの書に書いてある〉ことばをもって〈私たちの先祖たち〉に対して突きつけた言葉でした。「あなたがたは、モレクの幕屋と神ライパンの星を担いでいた。それらは、あなたがたが拝むために造った像ではないか。」(43)〈神が自分たちの前から追い払ってくださった異邦の民〉の神〈モレクの幕屋〉と神の〈あかしの幕屋〉とがもはや一緒くたになっていた、とステパノは言わんばかりでした。

イスラエルの民がモーセの後継者〈ヨシュアとともに〉〈幕屋〉を運び入れたのは「シロ」という所でした(ヨシュア 18:1)。しかしイスラエルの民は、死ぬ前のヨシュアから「あなたがたの中にある異国の神々を取り除き、イスラエルの神、主に心を傾けなさい。」(ヨシュア記 24:23)と戒められるほどでした。そんな神への不従順、不信仰を持ちながらも、神の〈幕屋〉を(殊に「あかしの箱」を)自分たちが持っていさえすれば神は自分たちとともにいる、〈幕屋〉で形ばかりの自分勝手な神礼拝をしていても神は自分たちとともにいる、と神を軽く見、侮っていたのです。「神がともにいる」ということが自分勝手な「御利益」「気休め」「困ったときの神頼み」でしかありませんでした。そこには天地万物をお造りになり、人間もお造りになり、それらすべてを支配しておられる偉大な神に対して、また殊に自分たちイスラエルの民をあわれみお恵みくださり、救ってくださり、自分たちの神となってくくださった神に対しての心からの感謝と喜び、また恐れ慎み、そして本当の信仰と従順はありませんでした。

ダビデが〈幕屋のとどまる場所〉、つまり神殿を建てることを求め、その子のソロモンがそれを建てました（46-47）。それは確かに神がお許しになったことでした。でも、そこに行って形式的に礼拝をすればそれで「自動的に」御利益にあずかれるのでは決してありません。〈幕屋〉にせよ神殿にせよ、神が造ることをお命じなり、またお許しになったのは、神がその民とともにいてくださり、その民のただ中に住んでくださることを信じる民が確認するための「あかし」が、信仰の弱い民には必要だと神がお認めになったからです。そのためには「建物」もそれなりに大事ですが、もっとはるかに大事なものは、そこにある、そこで語られ、教えられる神の〈生きたみことば〉であり、その神への全き信仰と従順なのです。なのに、イスラエルの民は神殿という建物そのものがまるで神であるかのように「偶像」視してしまったようでもあります。「天はわたしの王座、地はわたしの足台」（49）と言われる永遠、無限で偉大な神を〈（人間の）手で造った家〉に閉じ込め、その建物の立派さを人間が誇り、そんな人間の自分勝手な欲望に神を仕えさせようというのは無謀で悪魔的な企てです。

「わたしが目を留める者、それは、貧しい者、霊の砕かれた者、わたしのことばにおののく者だ。」（イザヤ 66:2）と神は言われます。神は今や信仰と悔い改めをもって復活のイエス・キリストに目を注ぎ、神を礼拝することを私たちに求めておられます。